ひょうご水百景

No.82　塩尾港（淡路市塩尾）

～豪商・高田屋嘉兵衛が故郷発展のために港の修築を支援～

写真-1　津名港　塩田地区（塩尾港）（平成 29 年 11 月撮影）

■　塩尾港の向うに見えるミニチュアパークの大観覧車

上の写真は、淡路市の津名港塩田地区（長ったらしい名称なので以下「塩尾港」と呼ぶ）を国道 28 号近くの防波堤上から撮影したものです。この港は幕末の豪商・高田屋嘉兵衛（たかたやかへえ）が、生まれ故郷の発展のために支援して完成させたものです。

その塩尾港の前方に見える大観覧車は、淡路市塩田新島にある「淡路ワールドパーク ONOKORO」です。

昭和 60（1985）年、淡路島と徳島を結ぶ大鳴門橋の開通を記念して淡路島で開催された「くにうみの祭典　淡路・愛ランド博」のメイン会場となった「おのころアイランド」がその前身です。

写真-2 塩尾港から「淡路ワールドパーク ONOKORO」を撮影。
大観覧車の左手に見える白いテントに「辰悦丸」が展示されている。

東側に大阪湾が広がる 12ha の敷地には、祭典の目玉として現在に甦らせた嘉兵衛初めての持ち船「辰悦丸」の実物大復元木造帆船が、高田屋嘉兵衛銅像とともに展示されています。

また、世界の建物や童話の再現シーンなどのミニチュアを展示、「兼高かおる旅の資料館」（兼高かおるは神戸市生まれ）や展望レストラン、大観覧車などの遊戯施設なども備えています。

祭典終了後、兵庫県の第 3 セクターが運営していましたが赤字運営だったために第 3 セクターを解散し、以来民間に経営委託することとし、現在は株式会社 ONOKORO が運営しています。

■ 幕末の豪商・高田屋嘉兵衛が修築を支援した塩尾港

塩尾港は、江戸時代中期の明和年間（1764~1772）に、藩主であった蜂須賀候が参勤交代で洲本千畳敷の桟橋から御座船で大坂に向かう際に、航路の安全を図るため避難港として築造したものだそうです。淡路東浦海岸は、夏季、東南の強風が多いのに避難港がなく、由良港や明石港、兵庫港へ避難しようとして難破する船が多かったからです。

東浦唯一の諸国船（しょこくぶね）の寄港地でしたが、やがて造船業や廻船業が発達し廻船問屋が千石船を浮かべるようになると、港口が狭いため船舶の出入りが甚だ不便で、加えて水深は浅いことから大型船が停泊できないなど、港としての機能に不足を来たすようになりました。地元ではたびたび港の修築計画を立案するも、多額の費用を要することから計画が具体化するまでには至りませんでした。

嘉兵衛の船が塩尾港に入港した際にその話を聞いた嘉兵衛は、文政９（1826）年塩尾港の修築支援に乗り出します。

現地調査をし、塩尾浦庄屋の平右衛門に協力して、同年６月 29 日「塩尾浦波戸普請御願書」を津名郡代に提出、官許を得ます。総費用 100 貫（金 1,500 両）のうちの 2/3 に当たる銀 66 貫目（金千両）を嘉兵衛が負担、地元の塩尾浦は 11 貫を調達し、残額 23 貫を無利息、5 年据え置き 20 年賦で阿波藩から拝借するという形で、文政 10（1827）年嘉兵衛自身の設計で着工し天保 2（1831）年に完成、大型船の出入りが可能になりました。

写真-3 塩尾港の東防波堤から北防波堤を撮影

残念ながら嘉兵衛は文政 10（1827）年４月５日、塩尾港の完成を見ることなく都志本邸で病没しました。享年 59 歳。塩尾浦の住民はその功績を讃え、完成した塩尾港を「高田屋港」と呼んでいたそうです。

戦後、国道 28 号の整備に伴い港の一部が埋め立てられましたが、今なお石積の防波堤の一部が修築当時のままの姿で残っています。

■ 塩尾港の昔と今

図-1 は、明治 31（1898）年、大日本帝国陸地測量部発行の地図です。写真-4 の空中写真と見比べてみると、明治期の塩尾港は現在とあまり変わっていないように見えます。『津名町史』には、明治６（1873）年の塩尾港が、港長二百八間（≒378m）、幅百十五間（≒209m）、深さが平均壱丈五尺（≒4.55m）と記されています。

図-1 明治 31 年当時の塩尾港

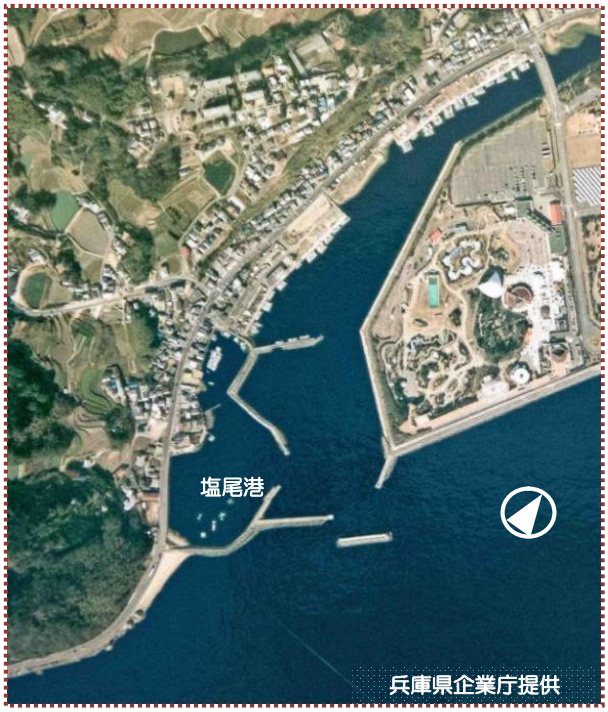

写真-4 現在の塩尾港（津名港塩田地区：平成 28 年２月撮影）

写真-5 塩尾港の港内風景
（前方に見えるのが「ワールドパーク ONOKORO」）

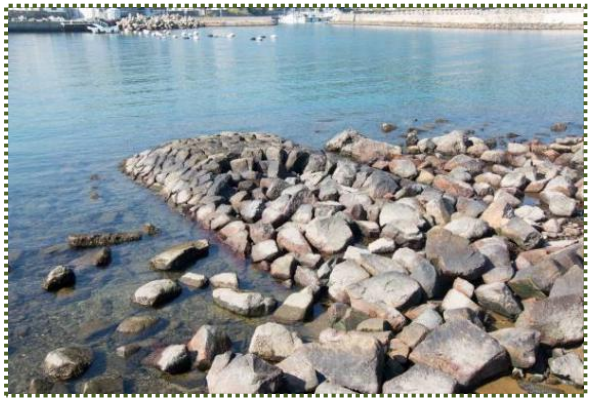

写真-6 沿い波※1 防止のための突堤（写真-1 参照）

※1 沿い波：港内への進入波が回折し防波堤に沿って進む波で、漁港などでは小型船の係留に支障を来たす場合がある。

■ 塩尾地区有志が嘉兵衛を讃え建立した顕彰碑

塩尾港修築に尽力した嘉兵衛を讃え、明治 39（1906）年塩尾地区の有志が「港之修築 遺徳百年 港人懐舊 豊碑永傳」などと刻まれた「塩尾港生碑」や嘉兵衛の石像を港近くに建立しました。また、大正 15（1926）年 4 月の「高田屋嘉兵衛翁百年祭」では石碑周りに玉垣が整備されています。

しかし、石碑や石像はこれまでに数回移転し、清掃に携わってきた地区の人も亡くなって、次第に顧みられなくなったようです。昭和 34（1959）年 12 月に現在地の国道 28 号沿いに移築されていますが、長い年月を経て石像を囲む石垣は崩れて雑草が生い茂り、放置されたままになっていました。

さらに、平成 16（2004）年の台風 23 号による豪雨で背後の山腹斜面が崩れ、その影響で玉垣が倒れてしまいました。また、がけ崩れの影響で周囲の雑木がなぎ倒され、伸びた枝が碑の近くにまで迫っていました。（写真-7）

写真-7 改修前の嘉兵衛翁顕彰碑（平成 25 年 5 月撮影）

そうした状況の中、淡路市は五色町（現・洲本市）の高田屋嘉兵衛翁顕彰会から嘉兵衛翁顕彰碑の改修要望を受け、淡路市教育委員会が対応を検討した結果、地元町内会などが「高田屋嘉兵衛の碑玉垣復元実行委員会」を立ち上げ、淡路市の文化財維持補助事業を利用して整備することになりました。整備が完了した平成 28（2016）年 10 月 25 日に、完成記念式典が現地で執り行われました。

なお、嘉兵衛の石像は永らく顔の左側面が欠けたままになっていました（写真-8）が、平成 29（2017）年春に「北前船寄港地・船主集落※2」が日本遺産に認定され嘉兵衛に注目が集まる中、このままでは忍びない、と住民有志 3 名が平成 29（2017）年 8 月新しい石像を寄進されたそうです（写真-9）。

写真-8 顔の左側面が欠けた旧石像

写真-9 新調された嘉兵衛の石像

※2 北前船寄港地・船主集落：「荒波を越えた男たちの夢が紡いだ異空間～北前船寄港地・船主集落～」が、平成 29（2017）年 4 月、文化庁の日本遺産に認定された。これを記念して「第 19 回北前船寄港地フォーラム in 淡路島」が同年 5 月に開催された。淡路島は北前船の寄港地ではないが、高田屋嘉兵衛の生誕地ということで井戸知事の肝いりで開催が決まったとか。このフォーラムは、北前船が寄港した地域が集まって、共通する観光資源を通じて地域の活性化を図っていこうという趣旨で始まったもの。

写真-10 嘉兵衛翁顕彰碑（平成29年11月撮影）

■ 塩田（塩尾港）、志筑、佐野の３港が統合して津名港に

淡路島の東浦（旧佐野港・旧生穂港など）は、港湾施設が未整備な昭和35（1960）年頃まで、漁船は浜に引き上げ管理し、旅客船は沖に停泊し小型船で本船と連絡する形態をとっていました。

旧塩田港（昔の名前は塩尾港）は、江戸時代、既述のとおり改修された結果、東浦で唯一帆船の寄港できる港でした。

幕末の頃までは塩尾港が栄え、明治以降は道路整備やバス路線網の進捗により、志筑港が海上交通の中心に変化していきます。

昭和25（1950）年、港湾法および漁港方法が制定された際に、東浦海岸沿いの４町は、塩田港（塩田村）・志筑港（志筑町）・佐野港（佐野町）を設立し、漁港法上の漁港として生穂漁港（生穂町）を設立します。いずれも兵庫県と関係町村の協議の結果、港の管理者は兵庫県とし、県営での整備・管理と決まりました。

昭和30（1955）年４月１日、この４町村が隣接の中田村・大町村と共に合併して津名町となりました（いわゆる「昭和の大合併」）。

その後、高度経済成長期に入り、従前の佐野港・生穂漁港・志筑港・塩田港と一般海域を総括・統合する新しい港湾計画が昭和45（1970）年８月に策定されます。生穂漁港区域は存続させて、その区域外の海域で従前の航路機能と港湾活動を支えながら共存する港湾計画（埋立計画）が策定されます。塩田から佐野までの海岸線約7kmの沖合650mまで、水深の浅い

図-2 塩尾港周辺の地図

区域を埋立てする計画です。埋立は、志筑地区（≒91.9ha）、生穂地区（≒67.5ha）、佐野地区（≒65.7ha）の 3 ブロックの工業用地とし、旧港の水域、港湾施設は、塩田地区・志筑地区・生穂地区・佐野地区と名付けて港湾を一元管理することに。塩田港区・生穂港区・佐野港区は水産物取扱を中心とした港として、志筑港区は公共ふ頭中心とする土地利用として４港区３ブロックの埋立地がそれぞれ機能分担を図ることとしています。新しい港の名前は、背後地の町名をとって津名港と名付けられました。

昭和 46（1971）年９月６日、港湾法に基づき津名港の設立認可があり、昭和 47（1972）年３月に津名港の港湾区域指定がなされました。

写真-11 塩尾港（平成 29 年 11 月撮影）

写真-11 は、平成 29（2017）年 11 月の塩尾港のお昼頃の風景です。風が凪いで時が止まっているようです。

■ 嘉兵衛、都志港の防波堤修築も支援

嘉兵衛は、新在家波戸（現・都志港）の修築も支援しています。文政８（1825）年、都志浦新在家才崎の下なる波戸を修築するに当たり、最初銀十貫匁（金 151 両余りに相当し、当時の米価に換算すると 180 余石となる）を寄付するとともに、その後の 10 年間、毎年金 10 両を寄付して都志港の修築を支援しています。

ただ、当時嘉兵衛は、都志浦海岸に一大港湾を独力で築造するという計画を持っていたそうです。そのことを聞いた都志浦庄屋は、嘉兵衛に独力で築港されては都志浦の体面上面白くなく、また浦人の船を係留するにも肩身の狭い思いをすることから、港は小規模でも浦人との共同で築港するほうが望ましいと洩らしていたとか。このことを聞いた嘉兵衛は、文政９（1826）年計画を変更して塩尾港の修築に注力することとします。

右のモノクロ写真-12 は、昭和初期の都志港の写真ですが、今はどうなっているのでしょうか。平成 29（2017）年 11 月初旬に現地を歩いていると、港を眺めているおじいさんがいたので、昔の都志港はどのあたりか聴いてみると、「今は埋め立てられてしもうて何も残ってない。向こうに見える倉庫のあたりが昔の都志港や。」おじいさんは、嘉兵衛の妻・おふさの血筋にあたるそうです。

写真-12 昭和初期の都志港
（「嘉兵衛の里めぐり健康ウォーキングコース」パンフレットから引用）

高田屋嘉兵衛公園にある「日露友好の像」の近くに、「旧都志港築堤石」が並べられています（写真-13）。これらの石は花崗岩で、高田屋嘉兵衛が修築したといわれる旧都志港の築堤石の一部だそうです。平成 10（1998）年 10 月、明石海峡大橋開通記念に開催した全国俳句大会記念碑の建立と同時期に旧都志港の一部を埋め立てるのに際して、不用になった築堤石を運んできたのではないでしょうか。

昭和 62（1987）年２月、県と五色町（現・洲本市）の公有水面埋立申請が許可され、埋立工事および港湾改修工事に着手、平成 11（1999）年度に竣工しています。

写真-13 旧都志港築堤石

写真-14 都志港空中写真（洲本土木事務所提供）

■ モノローグ

嘉兵衛の顕彰碑は塩尾港近くの国道 28 号沿いにあるため、バスで通過するたびに目に入り、雑草が生い茂り荒れたままの状況が気になっていました。嘉兵衛が郷土発展のために修築した川池堰堤と併せて塩尾港も書こうと思っていましたが、荒れたままでは書きづらく保留状態にしていましたが、このたびすっかりきれいになったので書くことができました。関係者の皆様、ありがとうございました。

写真-15 「淡路花さじき」の菜の花

高田屋顕彰館・歴史文化資料館で上映されている映像の中で、嘉兵衛が自分の人生を語るハイライトシーンに下記のフレーズが出てきます。

花を咲かせ / 実となり / 実は絞られて油となり

諸国を巡りて灯りとなり 網をつくろう手元を照らし

その網で取られた魚が肥料になって / ふるさとへ還る

ハマナデシコ（浜撫子）

ナデシコ科ナデシコ属の多年草で別名フジナデシコ（藤撫子）。海岸の崖地や砂地に生育し、本州（太平洋沿岸、一部日本海側西部の沿岸部）から沖縄および中国に分布する。茎は 50cm ほどになり、茎は株状の無毛で下部は木質化して堅い。葉は対生し、厚く光沢があって両面とも無毛だが縁に毛がある。根出葉はロゼット状となる。花期は 6～11 月で、茎の頂上に密につき、花は紅紫色、花弁の長さは 6～7mm。栽培種では花色は鮮明な紅色と白色があり、それぞれに早生や晩生がある。花の大きさは 1.5cm になる。

写真-16 塩尾港防波堤に咲いていたハマナデシコ（平成 25 年 7 月撮影）

【参考資料】

1 『洲本市史』 洲本市　昭和 49 年 10 月
2 『五色町史』 五色町　昭和 61 年 9 月
3 『津名町史～本編』 津名町史編集委員会　昭和 63 年 7 月
4 『高田屋嘉兵衛翁傳』 高田権平 編集兼発行　昭和 8 年 11 月
5 『旅立ちの唄』 門 信彦 淡路市長のブログ　平成 22 年 10 月　平成 28 年 10 月
6 『高田屋嘉兵衛翁顕彰会々報～第 34 号』 高田屋嘉兵衛翁顕彰会　平成 29 年 9 月
7 『淡路島のみなとの歴史』 「淡路島のみなとの歴史」編集委員会編　平成 26 年 5 月
8 『嘉兵衛の里めぐり健康ウォーキングコース・観光スポットガイド』 五色町・五色町教育委員会・高田屋嘉兵衛翁顕彰会 発行
9 『高田屋嘉兵衛、淡路ワールドパーク ONOKORO、辰悦丸（復元北前船）、津名港、ハマナデシコ』
フリー百科事典『ウィキペディア（Wikipedia）』

※発刊：平成 30（2018）年 3 月 『ひょうご水百景』No.82
改訂：令和　8（2026）年 4 月 『ひょうご水百景』No.82